九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

間柄の自律

菊澤，育代

https://hdl.handle.net/2324/1937184

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式６－２）

氏　　名	菊澤　育代
論　文　名	間柄の自律
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　近藤　加代子 副　査　　九州大学　　教授　　板橋　義三 副　査　　九州大学　　教授　　古賀　徹

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、近代社会理論において基盤的概念である個人および個人主義に疑問を投げかけ、現代において人間が直面している課題を解き明かす基盤的概念として間柄を定置する。間柄は、和辻哲郎が提起した人と人との関係性を意味する概念であるが、著者はそれから固定的な人間関係を払拭して、人が人と人との関係を内省して理念的に自らを再構築していく契機に転換した。

序章では間柄の自律が問題となる背景を歴史的理論的に概括した。個人主義をめぐる問題状況とそれを支える理論的フレームワークを批判的に検討して、個人の自律にかわるものとして間柄の自律を定置する本論文の問題設定を詳細に明らかにした。以下、社会理論上の基本概念である社会集団、個人の自律を批判的に検討して、間柄の自律を提起し、それによって社会関係としての共同性を組み替えて、新たな社会の展望をしている。

第１章では、社会集団における基本的概念として、身分、階級、共同体、コミュニティ、ゲゼルシャフト･ゲマインシャフトなどをあげて、それらをめぐる論争を踏まえつつ、問題点を整理し、間柄の自律論展開の前提となした。

第２章では個人の自律を扱っている。個人の自律は、近代社会理論の基盤的概念となっているが、個人が自律という形で成立できないこと、ならびに現在の状況は自律とはほど遠い、大衆化であることを、個人および個人主義をめぐる多くの論を批判的に検討することで明らかにしている。

第３章では間柄の自律の理論的フレームワークを明らかにしている。社会集団と区別される関係性で有り、主体の認識によって相互連関性が決定されるという。間柄は主体が弱いときには負の間柄となり閉塞的になる傾向があることを間柄の他律として注意を払っている。

第４章・第５章では間柄と共同性との関係を再定置した。エプロンダイヤグラムを利用して、プラットフォームとして共同性を捉えて帰属意識が生まれるものとしつつ、主体の自由な行動を制約しないものとされる。主体が間柄を尊重しながら主体的に判断していくことの中に自律があり、新しい共同性のあり方がある。

第６章では結論として、本論文を振り返り、間柄の自律を基礎とする共同性の重要性を強調している。

以上本論文は、主要な近代社会理論を多くの参考文献を踏まえて抜本的に検討したうえで、間柄の自律を個人の自律に代替する基盤的概念として定置することに成功している。博士論文として確かな学力が示された労作と言える。審査の結果全員一致で、本論文は博士（芸術工学）の学位に値するという結論を得た。